

■武満 徹／系図“Family Tree”―若い人たちのための音楽詩―

武満徹（1930-1996）が世界の音楽界で確固たる地歩を固めたのは、ニューヨーク・フィルの創立125周年を記念するために委嘱された《ノヴェンバー・ステップス》の初演がきっかけであった。琵琶と尺八を独奏とする一種の協奏曲である、この画期的な作品は、日本と西洋の美意識の出会いを演出し、極めて前衛的な作風で圧倒した。それから四半世紀、再びニューヨーク・フィルが創立150周年の記念演奏会に向けて、武満に新作を委嘱する。そのときの提案は子どもたちのための音楽だった。

これを受けて書かれたのが《系図“Family Tree”―若い人たちのための音楽詩―》。果たして、その響きは《ノヴェンバー・ステップス》とは様変わりした。《系図》を聴くと、コンサートのためのシリアスな音楽より、映画やドラマの音楽を思い出す。実際にこの曲で使われている主要なメロディは以前、テレビ・コマーシャル用に書かれたものから転用されたと言う。作曲家自身も「詩のここを生かすことに専一して、専門的なこだわりなど捨てて作曲しました。結果としては、たいへん調性的な響きのものになりました」（プログラム解説）と述べている。したがって、詩の内容に添おうとしたことは確かだが、それだけでなく、武満の晩年の作風そのものが汎調性を基盤とした心地よい「うた」へと変容していたことは大きかったと思われる。

テーマは「家族」である。生命から生命への連鎖がいま、どういう状態になっているのだろうかと思ったことが、作曲の理由だったそうだ。谷川俊太郎の『はだか』という詩集から6篇の詩を選び、一人の少女の語りとして再編成した。この言葉を少女が朗読する。思春期の心の揺らぎ、ときに突き放したような客観的な描写があったかと思うと、ぐっと感情移入する呼びかけがあるといった、子どもから大人への変化のさなかにある少女が家族の一人ひとりを観察している。オーケストラは朗読を彩り、支え、時には覆いかぶさるようにボリュームを増す。アンサンブルは繊細で色彩的に綴られているが、じつは3管編成と言っていい、大きな編成である。

「むかしむかし」は少女が大昔からつながる命の一曲としての自分を語る。導入部の終わり近く、ホルンがやさしさに満ちたメロディを奏でる。この主題は他の楽章でも現れる。続く楽章はタイトルの朗読で始まる。「おじいちゃん」の朗読に添えられる音楽には、やわらかいメロディにいささか不穏な音響が混じる。少女の抱く距離感や戸惑いだろうか。最後に序奏でのホルンの主題がフルートで奏でられる。「おばあちゃん」では祖母の死の瞬間をみつめる。「おとうさん」は食卓の一曲が描写される。おとうさんに愛されたい子どもの想いだろうか。最後はドラマティックに盛り上がる。再びホルンによる主題が流れ、温かな雰囲気にも包まれる。「おかあさん」はどこかへ行ってしまったお母さんを心配する少女の心の叫びだ。スティール・ドラムの音色が耳に残る。「とおく」では曲の冒頭の楽想が回想される。ここで繰り返される「とおくにきた」という言葉で少女は未来のことを語っているのだと、武満は述べている。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート3（ピッコロ持ち替え1、アルトフルート持ち替え1）、オーボエ2（イングリッシュホルン持ち替え1）、クラリネット4（バスクラリネット持ち替え1）、ファゴット3（コントラファゴット持ち替え1）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ビブラフォン、グロッケンシュピール、チューブラーベル、サスペンデッドシンバル、アンティークシンバル、タムタム、スティール・ドラム、ハーブ、チェレスタ、アコーディオン、語り手、弦五部

※スコア上の表記